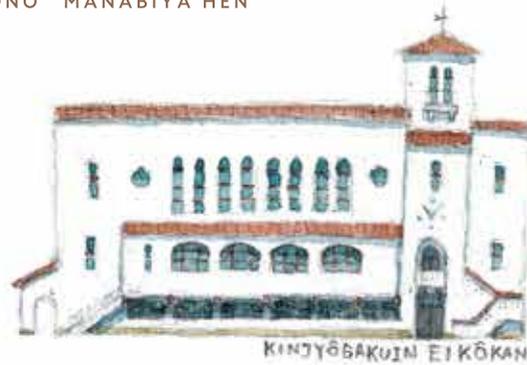


あいちのたてももの
まなびや編

AITI NO TATEMONO MANABIYA HEN

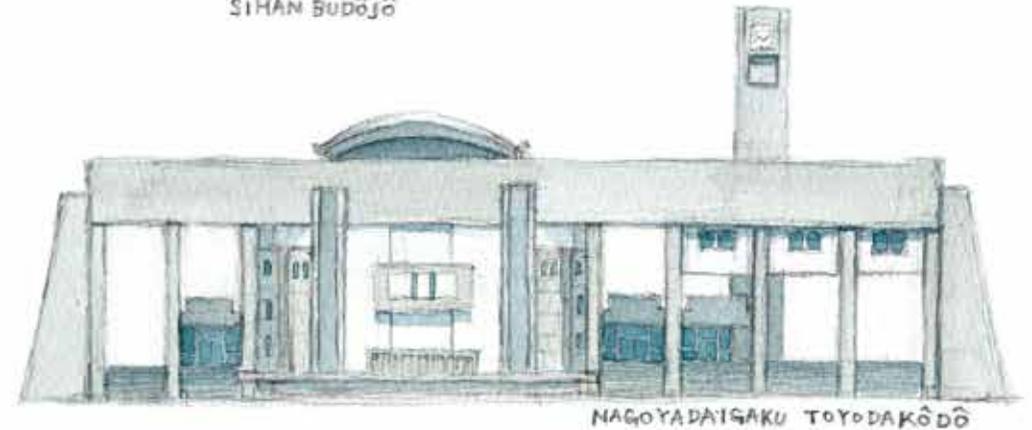


あいちのたてもものまなびや編

愛知県登録有形文化財建造物所有者の会



REGISTERED TANGIBLE
CULTURAL PROPERTY



愛知登録有形文化財

愛知
登
文
会

はじめに

私たちのまわりには、
古めかしい洋館や、立派なお屋敷、歴史のある校舎に、荘厳なお寺、
可愛らしい教会堂や、大きなレンガの工場、
そして役割を終えた電波塔など、年月を重ねた建物が、
ごく自然にまちにとけ込んでいます。
そういった文化財として貴重な建物を国登録有形文化財といいます。
日本には他にも、重要文化財や国宝などに指定された建物があり、
現在その総数は、1万5000件に上ります。
市指定・県指定のものを含めると、さらにその数は増えますが、
一方で、フランスの規定する歴史的記念物の4万4000件には遠くおよびません。
日本は文化的には、まだ発展途上なのです。

本書は、愛知県にある国登録有形文化財の魅力を紹介する本です。

今回は「まなびや編」として、明治から昭和にかけて建てられた

学校建築を取り上げています。

それらはすべて、あたりまえに残ってきたわけではありません。

多くの人々の努力で残されてきたものも少なくないのです。

そういった意味では、残された建物はすべて価値のある良い建築といえます。

そんな身近にある良い建築を知ること、

私たちのまちとその風景を大切に思う気持ちにつながってほしいと思います。

パリの美しい街並みも、フランスの人々がその重要性に気がつき、
建物と景観を大切に保存するまでは、多くの経験を積んできました。

この本が、建物とまちの歴史を知る一助になることを願っています。



もくじ

はじめに	2
愛知の建物、学び舎編	4
【コラム】建物を楽しむために	10
◆小・中学校	11
田峯小学校（普通教室棟／特別教室棟）	12
『特集1』田峰観音と子ども歌舞伎	14
（豊橋市民俗資料収蔵室本棟（旧多米小学校本校舎）	16
豊田市藤岡民俗資料館（旧藤岡中学校特別教室棟）	18
刈谷市郷土資料館（旧亀城小学校本館）	20
【コラム】ワークショップのすゝめ	22
◆高校	23
東海学園大講堂	24
『特集2』東海中学・高校の記念祭とカヅラカタ歌劇団	26
金城学院高等学校栄光館	28
南山学園ライネルス館	30
旧愛知県第二尋常中学校講堂	32



滝学園本館および講堂と図書館	34
【コラム】瀧文庫と図書館	36
◆大学	37
名古屋大学豊田講堂	38
『特集3』名建築家の手掛けたキャンパス	40
愛知大学記念館（旧陸軍第15師団司令部）	42
旧愛知県岡崎師範学校武道場	44
愛知学院大学楠元学舎	46
【コラム】昭和塾堂	48
◆門柱	49
愛知県立旧制学校の門柱たち	50
【コラム】明治村の学校建築たち	52
飯田喜四郎先生特別インタビュー	54
「学校建築に思うこと」	54
あいちのたてもの博覧会	55
国登録有形文化財とは	56
愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会とは	56

愛知の建物、 学び舎編

はじめに

私たちの身近にある公共の建物といえば、学校を思い浮かべる人も多いと思います。子どもの頃に通った小学校はもとより、多感な時期を過ごした中学・高校、大学や専門学校で何かに打ち込んだ思い出など、時が経っても心に残る風景として、私たちに寄り添っています。

それら学校の多くが鉄筋コンクリートで建てられ、教室の向きや廊下の場所など良く似た建物が多いことをご存知でしょうか。そのような定型化した建物にたどり着くまでには、とても興味深い歴史的な背景がありました。

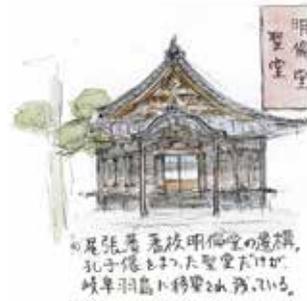
本書で紹介する国登録有形文化財の建物は、現在につながる学校建築の変遷を伝えています。明治から昭和にかけて建てられたそれらの建物は、単に昔の学校というだけでなく、かつては地域の人々にとってまちの自慢でもありました。

そんな学校の歴史を、少したどってみましょう。

江戸時代の学校

現在の学校のルーツは江戸時代の藩校や寺子屋などに求めることができます。

尾張藩では、初代藩主徳川義直が孔子を祀る聖堂と文庫を建て、学問所を設けたのが藩校の始まりといわれています。その後、藩士の子どもを教育する明倫堂が設立されました。明倫堂では儒教や国学のほか、さまざまな科目が学べたといえます。愛知県では他に豊



橋の時習館や豊田の崇化館、刈谷の文礼館などの藩校もありました。一方で、町民や農民の子どもが学んだ寺子屋は、読み書きそろばんとしつけを習う初歩的な教育が行われました。明治初期の小学校は、それら寺子屋を含む市井の郷校を転用して始められました。

今では江戸時代の学校建築はほとんど姿を消しましたが、明倫堂の聖堂は岐阜県羽島市の永照寺に移築され、本堂に転用されて現存しています。

明治維新後の愛知の学校

明治維新から5年、政府は国民すべての教育と国家の礎となる人材の養成をめざして「学制」を公布します。これは、全国に8つの大学と256の中学校、そして5万3760の小学校を設けるという大きな構想でした。ちょうどその頃、福沢諭吉の『学問のすゝめ』や、愛知県が発行した『学問のさとし』による教育の啓蒙もあり、各地に小学校が建設され始めました。

その中でも注目されるのが、長野県松本市の開智学校のような擬洋風建築の校舎です。大工棟梁たちが西洋建築をまねて創り上げたユーモラスな建物は、地域の人々にとって文明開化の象徴のように受け止められました。愛知県では名古屋市中南区に擬洋風の旧鳴尾学校が残されています。

壮大な構想を掲げた「学制」でしたが、実現には程遠く、明治12年の教育令の施行にあわせて廃止されました。教育令では各市町村の実情に合った小学校の開設が進められ、機能に即した校舎の建設が



推奨されました。この教育令の作成に携わったのが尾張藩出身で明倫堂に学んだ田中不二磨たなかふじもろでした。

片廊下型の完成

名古屋市東区代官町に生まれた田中不二磨は、佐幕派が優勢だった尾張藩の中で尊皇攘夷を唱え、維新後に明治政府で活躍した藩士です。明治4年に岩倉使節団に同行し欧米の教育制度を視察すると、帰国後は文部大輔ぶんぶだいすけとなり「学制」の実施に向け奔走します。また教育令の作成を進めるかたわら、校舎の配置計画や建築諸規則を広め、私立学校の開設に尽力するなど学校建設の礎を築きました。

田中が作成した教育令は、公布後も諸規則を頻繁に更新しつつ、それに伴い機能に準じた校舎の姿がたちづくられていきました。その到達点が、明治28年に文部省技師の久留正道くわむせうだうが著した「学校建築図説明および設計大要」(以下「大要」)です。これは学校の作り方を紹介した画期的な冊子でした。

例えば、校庭は南か東に配置し、教室は校庭に面して窓を大きくとり採光と換気に留意する。これは空気が入れ替えやすく、照明機器のない教室でも手元が影にならない工夫です。その他、教室の広さは四間(7・2メートル)×五間(9メートル)、天井高は九尺(2・7メートル)以上とし、廊下は片側に配し、虚飾を避け、衛生面に注意することなどが、図とともに細かく規定されました。また、実際に建設する際のお手本として、校舎の配置をコ字型やL字型などで示すモデルケースも紹介されています。



そして、明治26年に東海地方を襲った濃尾地震の経験から、平屋建てを原則とし、小屋組みにトラスを推奨しほうづえ方杖で補強することも盛り込まれました。

ここで示されたかたちが、現在の校舎まで続く片廊下型の基本的な形式となり、教室の広さも戦後もほぼそのまま踏襲され続ける基準となりました。本書で取り上げられている田峯小学校以下の校舎のほとんども、ここに準拠しています。

機能に特化し、いち早く定型化された学校建築は、明治の建物の中でも独自の発展を遂げました。「大要」が公布されたその年、東京駅の設計者辰野金吾たつのきんごの手掛けた日本銀行本店が完成していますが、荘重な西洋建築風の建物と比較すると、その違いがよく分かります。「大要」の公布を境に、木造平屋建ての片廊下型校舎は全国に普及していきました。

鉄筋コンクリートの校舎

大正12年、関東一円を襲ったマグニチュード7・9の大地震は首都圏に甚大な被害を与えました。

これをきっかけに脚光を浴びたのが、地震に強く火災に耐えられる鉄筋コンクリート造の建物でした。木造に比べると費用はかかりますが、2階建て以上に重層できるのも大きなメリットでした。

「学制」公布の頃には30%程度だった就学率も明治の終わりには90%を超え、日露戦争後には中学・高等学校への進学者も増えて、学校の数は増大していました。また明治初期に建てられた木造校舎の



筒井小学校

昭和11年

名古屋市で唯一
残る戦前の鉄
筋コンクリートの小
学校舎。



老朽化も問題となり、敷地の確保が難しくなっていた都心部では鉄筋コンクリート造は理にかなった構造形式でした。

震災後の東京では小学校の鉄筋コンクリート造が原則化されましたが、一方で地方への普及は進みませんでした。その大きな要因が建設技術の問題でした。木造に比べて新しい工法だった鉄筋コンクリート造の知識や経験を持つ技術者は、まだ少なかつたのです。

営繕課技師たちの活躍

愛知では、鉄筋コンクリート造の普及に県や市の営繕課の技師が貢献しました。名古屋市では大正10年に園町尋常小学校が、県内では大正8年に新設された県立一宮中学校(現一宮高校)ら4校を皮切りに、鉄筋コンクリート造の校舎が建てられています。

それら校舎の多くが、壁面を鉄筋コンクリートで造り、屋根を支える小屋組みを木造にした混構造で、現在の校舎に至る過渡期の構造と見ることが出来ます。本書に登場する旧亀城小学校や滝学園本館も同じ構造です。いずれの場合も、立派な校舎を望んだ地域の思いと、鉄筋コンクリート造の技術と経験をもらった技師が結びついて、特色のある建物が建てられました。

ところで、大正から昭和にかけては教育施設が充実した時代でもありました。理科室や裁縫室、唱歌室などの特別教室が増えたのもこの頃です。時代は下りますが、旧藤岡中学特別教室もその系列の建物です。また、明治23年の教育勅語以降に発達した講堂も鉄筋コンクリートで建てられるようになり、東海学園大講堂のような名作

が誕生しています。

しかし、華やかな時代は長くは続かず、やがて戦争が社会に暗い影を落とし始めます。日中戦争以降は、乏しい物資の中で鉄筋コンクリート造はもちろん、木造の校舎も厳しい制限を受けました。

戦時下で例外的に建てられた旧多米たみ小学校の鉄が使用されていない建て付けから、当時の生々しいようすがうかがえます。

おわりに

昭和20年、愛知の主要な都市は空襲で壊滅的な被害を受け、学校を含む多くの建物が焼失しました。その中には、爆撃を受けても倒壊を免れ、終戦直後から講義に使用された金城学院栄光館のような建物もありました。

やがて、戦災復興とともに鉄筋コンクリート造の学校が各地で建てられるようになり、明るく衛生的で頑丈な校舎が全国に行き渡りました。明治以来の壮大な構想は、ここでようやく実を結んだのです。

一方その裏では、古い学校はつきつきと姿を消していきました。僅かに残された校舎や講堂に足を踏み入れると、館内に漂う気配に言い知れない感動が込み上げてくることがあります。それは、建物にしみ込んだ懐かしい匂いが私たちの思い出とつながって、心に残る風景を鮮明に呼び覚ますからなのかもしれません。



バウハウス校舎
昭和元年
W・ゴッホ設計

「おそく世界イテ有名な校舎。昭和元年には、こんな先進的なガラスのカーテンウォールの校舎が登場していた。」

